

もえぎ

大野照八さん書

Ⅱ

Vol332

2020/1.15



医療法人社団萌気会

在宅療養支援診療所 (二日町)

在宅療養支援有床診療所 (浦佐)



福島県猫魔山山頂から見下ろす「桧原湖」

2P…武器とお金で動く世界を糺そう

3P…2020 年新年のごあいさつ

4P…漫画 黒岩卓夫一代記

5P…地域医療 百聞は一見にしかず

6P…生と死の間

7P…フォトギャラリー

8P…うちの利用者さん



1月26日(日) びしゃもん茶房
(10時～12時)

謹賀新年



新年のご挨拶

武器とお金で動く

世界を糺そう

医療法人萌気会 理事長 黒岩卓夫

新年明けましておめでとうございます。

新年といえば希望に燃えた明日を語り合い、流れる世代交代に節目をつけ、改めて行く先、来し方を自分のものとして組み立てる大切な時空だと思えます。

しかし国際情勢や国内情勢は混沌として、先がみえません。環境問題、炭素問題、原発問題、人種・宗教対立は拡散し、深刻になっています。その底辺には「お金」の動きやバラ撒くことで人は動き、世相を変えて行きます。

スウェーデンのグレート・トゥーンベリは、9月24日国連本部で全世界に「あなたたちの

裏切りに気付きはじめています」と訴えました。要するにおとなのことは信用できないということでしょう。その足元、国連の信頼性も揺らいでいます。中国習近平によるウイグル族絶滅計画に対して、中国から国連へのお金ほしさにウイグル族を見放しています。

膨大な難民対策すら、国連の延命策との告発もあります。中村哲医師は、医師を捨て、水と緑の再生こそ、根本的に人を助けるものと自ら重機のオペレータをつとめていました。その生命もすでに葬られています。

一方、私たちの立場は小さくてもチャレンジして夢を育むことをしたいと思います。わが国の第3の医療といわれて在宅医療も、地域づくりのなかで改めて行動しなければなりません。

今年から3年かけて「地域医療研究会」(1975年設立)と、NPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク(1995年設立)とが、しっかりと新たな目標を定めて統一したいと言ったことが検討され、実行されると思います。こうした医療・介護・市民あるいは保育も含めて文字通り地域づくりのテーマを背負うような組織になることは地域共生社会づくりの最先端にあると思います。

今年もよろしくお願ひします。

ると思います。わが国では他に類をみない仕事ではないでしょうか。全国の皆さんといつでも一緒に話し合えることがユニークにもなると思います。

また年初5日間沖縄に行ってきました。もちろんプライベートです。沖縄本島は米軍基地の島、そして宮古市(島で人口5万)は自衛隊のミサイル基地配備を目玉に島が武装します。噂によれば建設された職員用マンション「億ション」と言われています。

最後は、萌気は地域住民や患者さんとの間に信頼できる約束づくり(ブランド)をはじめます。Vision, Mission, Brandを職員皆でつくりたいと思っています。今年もよろしくお願ひします。

編集長 コラム

日本熊森協会



昨年の親子熊保護により、日本熊森協会と小冊子を知ることになった。

小冊子によると、「豊かな森を失い滅びようとしているのは、クマだけでなく人間を含めた全生物である」ことに気付いた中学生たちが行動を開始し熊森協会が出来た。

こども園の園長は小冊子の内容に共感し、職員用などに100冊取り寄せた。

年長さんの半数以上は熊の話題を耳にしており、子どもたちは、なぜクマが山から下りて来てしまうかを学び、我々大人たちは野生鳥獣が安心して暮らせる森の再生を誓った。

日本熊森協会の活動に興味を持たれた方は、ぜひ小冊子を手にしていただきたい。

ホームページ <http://kumamori.org/>



浦佐認定こども園



2020年 新年のごあいさつ

医療法人社団萌気会 事務局長 荒井 紀洋

新年あけまして おめでとうございます

今年は「庚子(かのえ・ね)」です。12年周期の始まりであり、私は子年生まれの子年男です。ねずみは牛の背中に乗って神様のところに行った話で、だから一番と幼少期に覚えました。ですが「子」の由来は、もともとは「ねずみ」のことではなく「子ども」を意味するとのこと。

干支に用いられる十二支は、日付や時刻・方位のための「記号」で、当初学者や貴族が使っていたのですが、庶民にも覚えやすいように動物を当てたのが紀元前200年ごろの中国だそうです。とはいえ「ねずみ年」は、そのイメージから「子孫繁栄」や「経済が上向きになる」と言われていますが、変化の年、新しいチャレンジに適した年とも言われます。

今年は地域の介護ニーズを踏まえ、昨年から検討してきた小規模多機能施設を浦佐診療所の2階に開設予定です。

また診療報酬改定もあり、あわただしい一年になることが予想されます。

職員一同、力を合わせ地域医療・介護サービスをしっかりと皆様に提供できるよう頑張ります。

本年も何卒よろしくお願い申し上げます。



令和元年最後の「びしゃもん茶房」が12月22日(日)に開催されました。参加費100円をいただき、コーヒーやお茶、手作りのお菓子を提供し、「歌」に「お喋り」と楽しい時間を過ごしていただいています。参加者が持ち寄る自慢の手料理も楽しみの一つで、この日のために何日も前から準備をしてくれる方もいます。また職員だけでは、細やかな対応をすることは難しいのですが、参加者やボランティアの方々の力をお借りすることで「びしゃもん茶房」が開催できています。

皆様1年間ありがとうございました。また来年もよろしくお願いいたします。



参加者の取りまとめを行う
コーディネイト役の
関さん

第三十三話 変身

勉強もさることながら
東京へ受験に行くには
姿勢好も整えねばならない



高3秋は丸刈最後だった

生まれて初めての床屋に
髪を伸ばしたが
うろたえていた

いったいぼくの
頭はどうなる
んだ！

下宿のおばさんに
そんな気持ちを見透かされた



大きな鏡に
面と向かうのも初めてだ

こんな顔なのかと
目のやり場がなかった

ひたすら無事に
終わるのを耐えていた

バリカンのような
痛みはなかったが

ポマードでカツチリ
固められた七三分けは

とんでもない
ことにはなりました

カツラを被されたようだった



変身！

不思議に何やら
度胸がついた

少しマシな服が
あるのを確かめて

これはツギ
がない！

これも生まれて初めて
皮靴を買い求め

体が宙に浮くような
気持ちで歩く練習

靴だけが
飛んでいく

おばさんが
思わず吹き出した

時計は兄貴から借りた

とても大人になった気分
で動く針を眺めていた

実は高3から
眼鏡をかけていた

昔、田舎者が江戸へ行くことを、「おのぼりさん」と呼んでいた。戦後でも子どもにとっては同じだった。TVないラジオも聞かない、新聞、雑誌もみない。東京もお江戸に変わりはない。そこで格好だけでもと俄かにつけようとする、その仕上がりそのものが、田舎者になってくる。

④ 昭和28年3月、この俄か「変身」でお江戸と闘う以外になかった。



地域医療 百聞は一見にしかず

東京慈恵会医科大学附属病院
研修医 大木 悠太郎

12月の1ヶ月間、地域医療研修として萌気会浦佐診療所で研修させて頂きました。

東京慈恵会医科大学附属病院の研修では地域研修として、新潟や福島などの地域で、小さな診療所から中小病院まで様々な施設にて、地域医療を経験することができます。

私は東京生まれ東京育ちで、豊かな自然に囲まれた地域での生活に憧れを持っていました。事前に先輩から「南魚沼の地は、豊かな自然に恵まれ、季節が変わるごとに山々は美しい姿を見せてくれる素晴らしいところであり、魚沼産コシヒカリといえば、誰もが知っていると言っていいほど、有名なお米で、それが毎日食べられる」と聞いており、迷うことなく新潟を選択しました。

しかし、当初は大学病院との違いから、日々、不安や戸惑いを感じていましたが、先生方を始め医療スタッフの方々が協力的にアシストを下さったおかげで、スムーズに診療を行い、経験を積むことができました。



また、特に訪問診療、リハビリ、通所介護施設での、住み慣れた環境で、本人の担ってきた役割や生きがいなどを大事にし、人とのつながりの理由を重視している高齢者と接した経験は、私の今までの医師感覚を覆すものでした。

我が国は、世界に先駆けて超高齢化社会に突入しており、私の勤務している病院も例外なく、認知



症や終末期の方、また重度の臓器障害を患った方がいらっしゃいます。

この方々の多くは、転院や施設入所に至るといったケースが多く見受けられ、私はそれが普通だと思い、疑問さえ抱きませんでした。

しかし、如何にかしてでも、自宅に帰してあげよう！自宅でも快適に生活できる為に必要な地域医療の包括的な取り組みや、職員の意気込みが、そこにはありました。

さらに自宅で家族に囲まれて穏やかに、安心して生活している方々の姿は、確実に普段の職場では触れることのできない、私が知らなかった医療であったと思います。

「地域医療」という言葉を頭で漫然と理解していても、やはり実際に目の当たりにすると全くの別物であり、研修医という医師として若い時期に経験できたことは、今後の長い医師人生の中で貴重なものとなることでしょう。

最後になりますが、黒岩卓夫理事長、黒岩巖志院長、そして医療スタッフの方々、事務の方々、南魚沼市の皆さん、ご迷惑をおかけする事も多々あったかと思いますが、大変お世話になりました。



生と死の間^(あわい)



黒岩卓夫
理事長

第2回もえぎ デスカフェ



樺沢賢正住職

令和元年12月21日(土)普光寺(浦佐毘沙門堂内)に於いて、第2回もえぎデスカフェが行われました。テーマは「生と死の間」。医療法人社団萌気会黒岩理事長からの提起で、

間

(あわい) 物と物、時と時とのあいだ。
物と物、人と人との組み合わせ。

多くの衣装の配色や人間関係にいう
頃合い、間柄、境界。

生と死を区分する(線引き)とすれば何か。
生と死の間、どちらでもない場や時があるのか。

というテーマをもとに普光寺樺沢賢正住職の
法話に始まり、医療・介護従事者や一般の参加
者が手作りのお菓子とお茶を飲みながら、それ
ぞれの思いを自由に語りあいました。

一般参加者の中には、大病を患い闘病生活を
乗り越えた経験を語り「死のう」と思っても死
ねなかったり「生きたい」と思っても生きられな
かったりと「死」は何処にでもあり、突如訪れる
であろう「死」に対する覚悟や心構えについて
自分と向き合い、家族と話し合うことの重要
性を訴えました。話を「わがこと」として耳を
傾け自分なりに「死」と向き合っていました。黒
岩理事長が高齢の患者さんに「今一番何がした
い?何が食べたい?」と質問していた事を思い
出し導き出した答えは、悔いのない充実した人
生の先に「死」というものがある。一日一日を大
切に真剣に生きて行こうと考えました。

事務局 田中 伊織

リゾートあぜ地

利用者さんと一緒に郷土料理「つぼ煮」作り



【材 料】

里芋、干瓢、牛蒡、干し椎茸、さつま揚げ、豆腐、人参、こんにゃく、醤油、
みりん、砂糖、ほんだし

【作り方】

- ① 2～3センチくらいの長さに野菜を刻む。
- ② 牛蒡、里芋、干瓢、こんにゃく、人参、さつま揚げ、豆腐の順に固い材料より鍋に入れ煮込む。
- ③ 里芋に箸が通ったら調味料を入れ好みの味に調える。
- ④ 弱火でコトコト煮込む

～ポイントとして利用者さんより～

- こんにゃくは縮むため小さく切らない方がよい。
- こんにゃくと豆腐は刻む前に湯通しをしておくこと。
- 里芋がとろけるくらいに煮込むと、野菜の甘みもでてほったが落ちるくらい美味くなるよ。



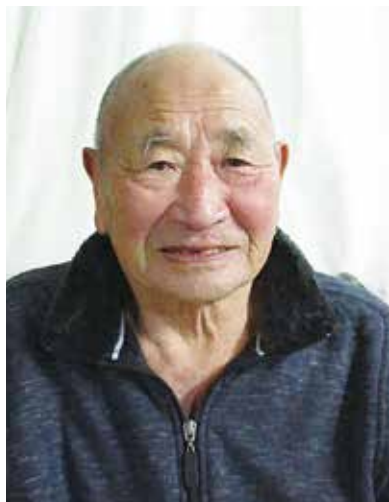
Photo Gallery

フォトギャラリー



うちの利用者さん 萌気園二日町診療所「曼陀羅華」

利用者 板鼻 虎雄 様



11月からご利用の板鼻虎雄さん、周りの利用者さんとも仲良くなり笑顔が絶えません。

若いころの仕事は大工と百姓でとても働き者だったそうです。田んぼも30個分あり今でも大体20個分はあるそうです。五十沢と城内の統合の手伝いもしたと昔話をしてくれました。

職員とも仲良しでレクリエーションにも積極的に参加してくれます。曼陀羅華を気に入ってもらえたようで職員一同嬉しく思います。

これからも昔話を沢山聞かせてくださいね。



リゾートあぜ地の風景 新たな挑戦

古民家を利用して始まったリゾートあぜ地は、1階はワンフロアで絶えず人の動きを感じる事ができ、認知症の方であっても玄関を入って第一声が「ここは見覚えのある場所のような気がする。なつかしい」と言う声が多く聞かれています。1人暮らしで病気により家での生活が難しい方、ご家族が病気により療養が必要などで自宅での生活がしばらくの間難しい方他の方に泊りを必要な期間長期で利用をして頂いた事もあり、利用者さんやご家族さんより、感謝の声を沢山頂いてきました。

2019年10月より小規模多機能ホームさくりの郷のサテライトとなり、少人数でどんな取り組みができるか、職員は模索しながら知恵を絞る合いながら、日々利用者さんより様々な事を教えてもらいながら奮闘しています。天気具合や出勤した職員の一声でお弁当を持って出かける事や紅葉狩り、浦佐の菊祭り、芋もち作りや季節の野菜を使ったおやつ作りなどを行って来しました。その中ではほんの一部を紹介します。



三國川ダムヘドライブ
おやつのサツマイモ
ほつぺたが落ちそう



戸田劇団座長と握手をしながら
一緒に五右衛門ブースを熱唱

ホテル木の芽坂へ観劇鑑賞



編集後記

今年最初のもえぎ新聞の表紙はいかがですか？

萌気園通所リハビリセンター浦佐 大谷 靖子

今年最初のもえぎ新聞の表紙はいかがですか？青い空と湖、真っ白な雪…。福島県裏磐梯に位置する「松原湖」冬はワカサギ釣りなどにぎわうそうです。

ご存じの方もいらっしゃると思いますが、編集長の田中伊織さんが県内外と休日を利用し出掛け、撮影した写真です。この素晴らしい功績を称え、12月のもえぎ大忘年会で特別表彰されました。そして2019年1月から12月までの人気投票発表がありました。

1位は10月の出雲崎の日本海を眺める松尾芭蕉。大海に浮かぶ佐渡ヶ島を見つめ、夕日に照らされたふんわりとした温かい写真ですね。

2位は9月の山古志「牛の角突き」激しくぶつかり合う勇壮な戦い。目にフォーカスし、今にも向かって来そうですね。

そして同じく2位の3月十日町市「幸せを呼ぶ傘つるし雛」ギネスブックに登録された世界最多級の数誇るつるし雛。色とりどりのたくさんの小さな雛、圧倒する巨大さが伝わってきます。3枚

の写真、みなさんはどう感じますか？

カメラは撮れる世界は無限大です。背景を作ると主役がキラリ。その撮る位置、光の明るさ、色のバランス、シャッタースピード。この全てが重ならないとステキな写真は撮れません。それと同じく田中編集長の休日の天気が一番大事です。天気の善し悪しでは良いものが撮れず、また別の日にと大変さを聞きます。自分だけの1枚を撮りに、カメラのあるちょっといい毎日、そんな風にも感じます。

そして、一番最初に目に入る表紙を見ていただき、今年も「もえぎ新聞」を手にとっていただけるとうれしいです。

